

2009年6月7日 主日礼拝メッセージ

聖書箇所：第一サムエル記2章22～36節

説教題：だれが仲裁して下さるのか

あらすじ

続けてサムエル記を見て参ります。祭司であったエリにはふたりの息子がおりました。父親のあとを継いで同じ祭司の職に就いております。しかし、このふたりは祭司の立場を利用して、力づくで人々のささげものを横取りしていくというひどいことをしていました。2章17節で「このように、子たちの罪は、主の前で非常に大きかった。主への献げものを、この人たちが侮ったからである」と言われています。

息子たちがしていたことを父親であるエリは黙って見過ごしていたわけではありません。エリは息子たちを呼んで、忠告を与えています。しかし、それで問題は解決していかない。むしろ、ますます厳しいことになっていきました。

ここにどのような神のみこころが示されているのか、考えて参ります。

1 エリ

(1) 息子たちを正しく指導できなかった？

エリは非常に歳をとり体力の衰えを感じています。そんなエリの耳にも息子たちの悪い噂が聞こえてきました。エリは息子たちを呼び、「そういうことをしてはいけない」と指導します。しかし、息子らは父親の忠告を完全に無視してしまいます。

どんな理由であれ、息子たちの暴走を食い止めることができなかつたのですから、祭司

エリのリーダーシップに問題があつたこととなります。父親として息子を正しく育てられなかつたことも問題となります。

ではこの箇所は、子どもを正しく育てられない家族には、こんな罰が下るといふ教訓ということでしょうか。でもどうですか。子供を育てることに自信がある方はいますか。むしろ、多くの人は子育てに弱さを感じています。エリのような私たちなんです。私たちもエリのような罰を受けるということか。もしそうなら、私たちはつらい思いになるだけです。

もちろん、そんなはずはない。ではどういふことなのか。もっと別の問題を神は取り扱っておられるように思うのです。

(2) 問題解決の努力はした？

そのことを考える糸口は、エリの言葉の中にあります。25節。「人がもし、ほかの人に対して罪を犯すと、神がその仲裁をして下さる。だが、人が主に対して罪を犯したら、だれが、そのものために仲裁に立とうか。」

息子たちがしていることは、神に対して罪を犯すことであるとエリは理解していました。神に対して罪を犯してしまったら、誰も仲裁に立つ者がいない。だから、お前たちはただちに悪いことを止め、事を正しく行わなければならないのだと言っています。

エリは、神のことをちゃんと意識しているように見えます。乱暴の限りを尽くしている

息子たちを戒め、立ち直らせようと一生懸命エリもやるべきことをやっているようにも見えます。

結果的に、エリは息子たちの指導はできなかったかもしれません。でも、すべきことはきちんと努力した。だからエリには責任はない。あとは息子たちの責任だと思いたいところです。

2 神の人（預言者）

（1）エリの責任を問う

ところが、この後エリの所に神の人が参ります。神の人とはおそらく当時の預言者であったと思われます。彼はエリにこう語ります。

29節。「なぜ、あなたがたは、わたしが命じたわたしへのいけにえ、わたしへのささげ物を、わたしの住む所で軽くあしらい、またあなたは、わたしよりも自分の息子たちを重んじて、わたしの民イスラエルのすべてのささげ物のうち最上の部分で自分たちを肥やそうとするのか。」

実際にいけにえを粗末に扱い、ひどいことをしたのは息子たちでした。ところが神の人は「あなたがた」と言う。父親であるエリも息子たちと同じ責任があると指摘しています。エリも主へのささげ物を軽くあしらっていると問われています。エリは、神よりも自分の息子たちを重んじていると断じられています。エリも同罪だということです。

なぜそこまでエリの責任が厳しく問われるのでしょうか。エリは、一応息子たちの指導をしようと努力はしているのではないか。そんなに厳しく責めなくてもよいのではないかと思うかもしれません。

（2）本当の問題は何か

エリの指導力が問題なのでしょうか。もしそうであるのなら、あまりにも厳しすぎる神の仕打ちのように見えます。「あなたの家の多くの者はみな、壮年のうちに死ななければならない。あなたのふたりの息子ホフニとピネハスの身に降りかかることが、あなたへのしるしである。ふたりとも一日のうちに死ぬ。」

結論から申し上げます。神はエリの指導力とか、息子たちの育て方とか、そんなことを問題にされているわけではありません。実にエリの信仰の狭さを問題とされていることが次第にわかってきます。

3 仲裁者の問題

（1）ヨブの信仰

エリは語っていました。もう一度繰り返します。25節。「人がもし人に対して罪を犯すと、神がその仲裁をしてください。だが、人が主に対して罪を犯したら、だれが、その者のために仲裁に立とうか」

エリはこう言っています。もし人が主に対して罪を犯してしまったなら、もう誰も仲裁に立つ者はいない。だから、そんなことをしてしまったら取り返しがつかない。もうどうすることもできない。全く救われる道はない。絶望するしかない。

エリの言っていることは真実なのでしょうか。実はエリと全く正反対のことを信じていた人が聖書に出て参ります。前回も少し取り上げましたが、ヨブという人です。ヨブには七人の息子があったのですが、その息子たちのことでこんなことを考えていました。「私の息子たちが、あるいは罪を犯し、心の中で神をのろったかもしれない。」ヨブ

は、息子たちがもしかして主に対して罪を犯してしまっただけかもしれない。その可能性をいつも心に留めていました。悪い噂を聞いたわけでもありません。いや、むしろ息子たちも主と共に歩んでいるそんな美しい姿を見て親として安心することが多かったと思う。それでもヨブは考える。息子たちはもしかして主の前に罪を犯しているかもしれない。そこで彼がしたことは何か。彼は息子たちのために全焼のいけにえをささげた、と書かれています。ヨブはいつもそうしていました。

主はそのようなヨブをご覧になり、こうお語りになりました。「彼のような潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっている者は一人も地上にはいない。」

(2) ヨブは全焼のいけにえをささげる

もしかして息子たちは心の中で神をのろったかもしれない。どうかその罪を赦していただきたい。そう祈りながら、全焼のいけにえをささげました。

さて、ヨブはなぜ全焼のいけにえをささげたのでしょうか。神が命じておられたから。それで、神が定めた方法に従っただけ。単なる儀式とか手続きと言うことでしょうか。しかし、神は意味のない儀式とか手続きを私たちに求める方では決してありません。すべてには神の深い御心があります。全焼のいけにえをささげるという行為の中にも、神の深いご計画が示されているはずで、それは何か。

レビ記の最初のところに、全焼のいけにえをささげる意味が記されて言います。1章4節。「その人は、全焼のいけにえの頭の上に手を置く。それが彼を贖うため、彼の代わりに受け入れられるためである。」

どうして全焼のいけにえをささげるよう

に言われるのか。それは、あなたの罪を背負って、動物が身代わりとなって神の前で殺されていく。そうやってあなたの罪は赦されるのだ。そのことを具体的に目に見える形で教えるために、神が与えてくださったものでした。ここで大切なのは、私たちの罪のために身代わりになるものがあるということです。神と私たちの間に立って、私たちの罪の仲裁に立つものが確かにあることを示しています。

ヨブが息子たちの罪のために全焼のいけにえをささげた。それはとりもなおさず、神と人との間に立って仲裁してくださる方の存在を信じ続けていたということです。

(3) エリはいけにえを軽んじる

ところがエリはどうであったのか。エリの信仰とヨブの信仰を比べてみてください。エリは神を信じてはいるかもしれない。しかしエリはこう言っているのです。「人が主に対して罪を犯したら、だれが、その者のために仲裁に立とうか。」仲裁に立つ者などいるはずがない。そう言っているのです。ここにエリとヨブの信仰の違いが明らかになります。

ヨブは、仲裁してくださる方の存在を信じているから全焼のいけにえを大切なことと思っ、それをささげました。ところが、エリはそうではない。神と人との間に立って仲裁してくださる方の存在など信じていません。その結果どうなるか。全焼のいけにえを軽く扱うことになります。あれは単なる形式なのだ。みんなから文句を言われぬように、手順さえきちんと守っていればいいのだ。そういう考え方に当然なっていくます。

だから、神の人はエリに向かって警告するのです。29節。「なぜ、あなたがたは、わた

しが命じたわたしへのいけにえ、わたしへのささげ物を、わたしの住むところで軽くあしらい、またあなたは、わたしよりも自分の息子たちを重んじて、わたしの民イスラエルのすべてのささげ物のうち最上の部分で自分たちを肥やそうとするのか。」

神の人はエリの信仰の問題をズバリと言い当てています。エリは全焼のいけにえの意味を知らなかった。知らないから軽くあしらうことになる。親の信仰の影響を受けて、当然息子たちも同じ事をします。

(4) 遅すぎることはなかったのに

エリは神の人からの厳しい警告を聞きました。しかし、彼がそれを聞いてこの後何か具体的に行動したわけではありません。何もしないままです。本当は何をすればよかったのでしょうか。もう神のさばきは決定的なので、あきらめるしかなかったのでしょうか。後は投げやりになるしかなかったのか。

神とはいったいどのようなお方ですか。神に立ち返ると言うことに遅すぎると言うことがあるのでしょうか。もしそうであるなら、私たちはとっくの昔に、神に対して取り返しのつかないことをしてきたのではないですか。本当なら取り返しのつかないことであるはずなのに、神はあわれみの方なので、怒るのに遅く、忍耐して私たちを救おうとされている。だから、私たちは救われた。

エリだってそうなのです。決して遅くはなかった。彼は、神の人から警告を聞いた後に、悔い改め、息子たちのために全焼のいけにえをささげることができたはずなのです。そうしたなら、神は思い直され、厳しいさばきを止められる。そういうお方なのです。

ところが、エリは何もしなかった。その結

果、エリの家族はまさにこのような取り扱いを受けていくことになるのです。

4 真の仲裁者がおられる

最初ここを読んだとき、厳しい神のお姿に見えてしまい、気が重くなったかも知れませんが、でも、誤解しないでいただきたい。どうして神がこのようにエリに対して厳しいことをなさるのか。神の本当の御思いを知っていただきたい。

神は伝えたいのです。たとえ神に私たちが罪を犯したとしても、私たちには仲裁者がおられる。あなた方には救いの道がある。だから決してあきらめてはならない。神が仲裁者を与えているのだから、その方を信じなさい。決して遅すぎると言うことはない。私の罪が重過ぎて、だめだということはない。どんな罪を犯したとしても、神が与えてくださる仲裁者を信じるなら、神は決して軽く扱うことなどない。いや、絶対に見捨てることはない。

エリに厳しいことが語られているそのことばを裏返せば、それだけ神の愛は私たち私たちに向けてあふれているのだということです。

神の人はこう語りました。35節。「わたしは、わたしの心と思いの中で事を行う忠実な祭司を、わたしのために起こそう。わたしは彼のために長く続く家を建てよう。彼は、いつまでもわたしに油注がれた者の前を歩むであろう。」

「忠実な祭司」とは、やがて来られるイエス・キリストを指します。かつて動物たちが身代わりとなり、仲裁する役割が与えられていました。しかし今、私たちには真実の仲裁者が与えられております。私たちの罪の身代わりとなられる方が与えられています。

エリは仲裁者がいないと言って絶望しました。しかし、私たちはそうではない。例えば、私たちがどん底の中に突き落とされたとしても、真の仲裁者であるイエス・キリストは、どん底まで降りてきてくださり、私たち以上に小さくなられ、低くなられ、私たちのすぐそばに腰をかかめておられます。その手と脇腹には傷があります。額にはいばらの冠があります。血を流し傷ついている仲裁者の姿があります。

今朝、厳しいように思われる御言葉の中に、実は主の豊かな恵みとあわれみが示されていることを覚え、ともに主の十字架を仰ぎ見たいと願います。